

【学会報告】**サブサハラ・アフリカの村落部に住む離乳期の子どもをもつ母親の
早期母乳育児に関する意識調査（予備調査）**長堀 智香子¹⁾

1) つくば国際大学 医療保健学部 看護学科

【背景】

サブサハラ・アフリカでは、栄養不良が乳幼児死亡の大きな要因とされており、WHO は「生後 1 時間以内に母乳育児を開始し、6 か月間は完全母乳で育て、2 年以上母乳育児を続けることができれば、衰弱や肥満など子どもを栄養不良から守ることができる」として、完全母乳育児を推奨している。本研究の目的はサブサハラ・アフリカの村落部に住む離乳期の子どもをもつ母親の早期母乳育児に関する意識や行動を明らかにすることであり、サブサハラ諸国が抱える乳幼児の栄養に関する課題解決のための予備調査とする。

【方法】

ベナン村落部に居住する離乳期の子どもをもつ母親または養育者 20 名に対し、生後 3 日間の母乳育児について聞き取り調査を行った。質問票は先行研究を参考に、現地の栄養士である研究協力者らと検討して作成した。現地語を介してのインタビューになるため通常より時間を要すること、対象者は乳児を抱いて参加することなどから、質問項目を出生後から 3 日間の栄養に関する最小限の項目に限定した。

【結果】

出生 1 時間以内に母乳を与えた母親が 13 名 (65%) であり、生後 3 日間に 13 名 (65%) の養育者が新生児に「薬草」を与えていた。薬草使用の理由は「胎便を速やかに出す」「老廃物を出させるため」「へその緒の傷が速く治るように」など、子どもの健康のための慣習であると思われる。

【考察】

同国の調査では、女性の医療行動に関して、意思決定者は女性以外である場合が多いことが分かる。今後、早期母乳育児を含む子どもの栄養状態を良好に保つための介入には、家族を巻き込んだ取り組みが必要である。また、WHO の報告でベナンの約 80% は「伝統医療および相補・代替医療」を利用している。人々の行動の意味づけを考察するために、より詳細な聞き取り調査を実施する必要があると考える。

キーワード：栄養不良、早期母乳育児、サブサハラ・アフリカ